

バレエの回転動作における軸についての研究

A study of the axis in case of turn operation of the ballet

1K08B061-2 北尻 華穂

指導教員 主査 杉山千鶴 先生 副査 高橋佳子 先生

【目的】

筆者は3歳から高等学校を卒業するまでクラシックバレエを習っていたのだが、他のパに比べて回転系のパが苦手であった。長年にわたる回転に対する苦手意識を克服して安定して回る感覚を身につけるにはどうすれば良いのかと迷っていた時に友人のバレエの発表会を見て、回転が得意な人と自分との最も大きな違いは回っている時の軸のとり方なのではないかということに気がついた。

そこで本研究では、難易度の高い回転動作とシンプルな回転動作を通じて回転に必要な不可欠な要素を明らかにすることを目的とする。

【方法】

本研究では、①フェット・ロン・ドゥ・ジャンプ・アン・トゥールナン、②イタリアン・フェット、③ピルエット、④シェネの4つの回転のパを対象とする。教則本及び筆者の経験による語義規定を行った上でこれらをすり合わせ、本研究における語義規定を行う

女性は西田佑子、男性は首藤康之を対象とし、有名かつ上演されることの多い「コッペリア」と「ドン・キホーテ」の2作品の映像から考察を行い、回転に必要な要素とは一体何なのかを導き出していく。

【結果および考察】

①フェット・ロン・ドゥ・ジャンプ・アン・トゥールナン

- ・軸に対し、体をコンパクトにまとめる
- ・脚を振る力と顔をつけることによって回る
- ・上体を引き上げ、重心を落とさないようにする

このパはトウに立ったりア・テールに下りたりという動きが激しいため、トウから下りる際について体を一緒に落としてしまいがちである。しかし常に体を引き上げた状態でなければ体力を消耗せずに回り続けることは難しいと考えられる。「白鳥の湖」や「ドン・キホーテ」などのフェット・ロン・ドゥ・ジャンプ・アン・トゥールナンが見せ場とされている作品では32回転のトランド・ドー・フェットを用いることが多く、これは主に最後のグラン・パ・ド・ドーのコーダで回らなければならない

ため、このパで残りの体力を使いきってしまった後はその後のクライマックスを盛り上げることができない。

②イタリアン・フェット

- ・つま先から頭の先まで細い軸を通す
- ・後ろを向いた時に重心を落とさない

これは他の回転と違い、軸が床に対して垂直ではなくても良い。しかしたとえ傾いていたとしても、1本の真っ直ぐな軸が通っていなければ安定感を持って回ることはできない。そうした事態を防ぐためにも、軸を引き上げておかねばならない。

③ピルエット

- ・顔をしっかりとつける
- ・上半身を安定させ、プレパレーションから着地までブレない軸を持つ

ピルエットは高いルルベで立ち、完全にアンドゥウォールされたパッセで回るのが基本であるが、そうしたことを守らなくとも安定して回れるということが映像資料により分かった。しかしより正確に、また見栄えを良くするためにはこれらのことにも気を配った方が良さだろう。

④シェネ

- ・正確なアンドゥウォール
- ・素早く顔をつける
- ・細い軸に対して体を回転させていく

シェネは1番ポジションのルルベのまま回転していくパである。客席からもポジションが正確であるかが見てとりやすいため、脚だけでなく腕のポジションも正確にとって保ち続ける必要がある。

【結論】

対象とした4つの回転動作においてとされる要素とは

- ・プレパレーションから着地まで軸がどこにあるのかという意識を強く持つこと
- ・重心を決して落とさないこと
- ・顔をしっかりとつけること

ではないかという考えに至った。人によって多少の癖はあるだろうが、これらのことに気をつけていればどのような回転のパであったとしてもきれいに回ることができるだろう。